【暮らしの学び舎 Salmatt 企画】家庭科で育つ子どもと私の Well-being
第2回 20260530(土)10:00-12:00

2026 年度「暮らしの学び舎 Salmatt 企画」家庭科で育つ子どもと私の Well-being の第2回カタリバ「家庭科の今，私の課題」を 5 月 30 日（土）10 時からオンラインで行いました。第 1 回と同様に，約 20 名の方々が参加くださり，梶山さんと中村さんが企画の準備，当日の運営，進行を担当してくださいました。第 1 回の振り返りを行った後，参加者全員が家庭科教育の現状と課題について自分の思いを語りました。学習指導要領の改訂に伴う家庭科の学習内容の構造化の課題や，理論と実践のギャップ，そして教員同士のネットワーク構築の重要性が具体的な意見とともに共有されました。
プログラムは次の通りでした。

9:45～10:00（15 分）	受付
10:00～10:20（20分）	趣旨説明，第 1 回の振り返り，第 1 回アンケートの概要
10:20～11:45（85分）	カタリバ（自分の家庭科，家政教育に係る課題，皆さんに聞いてみたいこと）
11:45～12:00（15 分）	諸連絡，アンケート，次回予告

第 1 回の振り返り，第 1 回アンケートの概要は，パワーポイントの資料ファイルをご覧ください。
第 2 回カタリバで共有された話題について，以下に要約を示します。

家庭科教育における校種連携及び他教科理解の必要性
学習指導要領の家庭科の領域が家庭科以外の教科では，小学校，中学校，高校で異なっていることに気づき，他教科を知って家庭科の独自性に気づくことが必要であるとの意見が聞かれた。家庭科教員研修における専門講座を通じて，小学校，中学校，高校の先生たちが意見交換しネットワークを構築できる機会を提供している例が紹介された。改訂学習指導要領での家庭科の内容分離について懸念が示され，A 領域と B 領域単体での授業は高校では困難であるとの意見，従来の統合的なアプローチを維持したいという意見が聞かれた。
家庭科学習指導方法
家庭科における ABCDE 領域の表現について懸念が示され，家庭科では題材の中で内容を統合して指導することが重要であるという意見が聞かれた。中学校と小学校では題材を使用するのに対し，高校では単元を使用する理由について質問があり，それに関連して総合学科での「家庭基礎」の現場体験を共有した。高校において複数の教員が担当する現状では，個々の教員による内容融合の題材設定は難しく，評価の平等性を図るために教科書ベースでワークシート作成して授業を進めるしかない現状があるとのことであった。
家庭科学習指導要領議論
家庭科の学習指導要領に関して，参加者たちから，生活の経営と領域分けについて懸念が聞かれ，経済計画に重点が置かれていることや，個人探究と共同探究の定義について質問があった。家庭科の「家庭らしさ」が失われている可能性が指摘され，経済的側面に過度に焦点が当てられていることを懸念した。他教科との領域の定義の違いについて質問があり，他教科の取り組み方法についての情報が求められた。さらに学習指導要領と実践のギャップについて議論が行われた。
中国と日本の比較
中国では義務教育段階で家政教育が行われていないため，家事教育のような役割を担うと認識されることが多いとの説明がなされた。また中国の労働教育は，日常生活労働，生産労働，サービス労働の三つの部分から構成されており，社会への貢献を重視していることを共有した。また，日本と中国の教育システムの違いについて議論し，日本の家庭科が体系的で生活技能に重点を置いているのに対し，中国の労働教育は社会とのつながりや貢

献に焦点を当てていると指摘した。中国の労働教育と日本の家庭科の主要な違いとして，家庭中心的な教育の重要性が強調され，中国の教育システムに家庭視点を取り入れる必要性が聞かれた。

小から中学校の移行課題と生活経験の不足

中学校での学年別担任システムと小学校からの移行についての課題，教員としての経験不足への懸念が聞かれた。海外在住の経験から，子供たちの生活経験の不足について懸念が示され，両国の教育システムの違いについて質問があった。

学習指導要領5領域議論へのさらなる意見

家庭科の改訂学習指導要領における5領域の導入について議論が行われた。現実的な授業準備の観点から，5つの領域を細かく分けることは時間的制約や実務面で困難であることが指摘された。さらに，生活を総合的に捉える家庭科の特性を失う可能性や，過度に分化することで子供の理解を阻害するリスクについて懸念が示された。教科の一つとして家庭科が担う基礎的・基本的知識・技能を捉えた上で，家庭科としての方向性をより明確に示す必要性が強調された。

家庭科教育の題材・単元議論への意見

初等教育から中等教育までの家庭科教育における題材と単元の概念について，小学校は教科書に基づく題材レベルでの授業実践が定着している一方，中学校と高校では単元レベルでの授業が多用されているとの意見が聞かれた。高校での単元使用については評価の問題が主要な懸念事項であり，題材レベルでの評価が困難であることが指摘された。年間指導計画を構想して題材の整理を進める重要性が強調され，現場との理論の乖離を解消する必要性について意見が聞かれた。

家庭科教育の家政学から捉えた実践と課題

家庭科教育の実践について，家政学の観点からの意見が聞かれ，小中高のスパイラル学習における家庭科の特性と課題を共有した。家庭科は他教科と異なり，個人の生活やプライバシーを尊重しながら科学的な学びを提供する必要があることが強調された。参加者たちは家庭科の教育的価値と実践の難しさについて議論し，学習指導要領の見方や学習内容の領域を超えたストーリー作りの重要性について合意した。

まとめ

新しい参加者も加わり，海外の学校教育の実態も踏まえて，日本の家庭科の特徴，子どもたちの実態や教育現場の課題を第１回の意見交換より踏み込んで議論できたと思う。「答えはない，多様でよいのだから追究しなくてもよい」のではなく，多様な立場の多様な教育環境，社会環境にいる他者の意見や情報を得て，自分なりの答えをどこまでも追究していくことの重要性や姿勢が大切なのだということを感じた。家庭科は，他教科と異なる様々な独自性をもつが，思考の仕方の違い，すなわち，分化した知識を統合していくだけではなく，複雑に絡み合う課題を多様な側面から子どもたち自身が追究し，そこに必要な科学的原理や知識をみいだしていく学びの場があること，その独自性を強調できると考えた時間であった。

次回予告

6 月に開催される第3回の羊毛フェルト教材作り体験活動について対面実施が案内された。7 月には工藤先生が家庭科教師向けのテーマについて講話してくださることが案内された。

会議の最後に，参加者たちは今回のセッションの価値と，研究者と現場教師の視点の交換について感想を共有した。